
僕が落ちて消えるまで

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が落ちて消えるまで

【Nコード】

N2032BA

【作者名】

屋下雨宿

【あらすじ】

校舎から落ちて死んでしまった生徒の話。

僕が落ちて消えるまで（1）

二人の生徒が薄暗い校舎の階段を駆け上っていく。一人は僕で、もう一人は彼女。

計一四段の階段を上りきって素早く切り返すのは先に行く彼女。名前は、佐竹鈴子。さたけすここの高校の三年生で生徒会長を務める優等生。サラサラのロングヘアを靡かせながら、ミニスカートの中などにせず一段飛ばしで大胆に上っていく。

切り返しの度に、一段分ぐらい離されていくのが僕。名は芦馬圭太。あしまけいた同じく高校三年生。僕は生徒役員とか言う訳ではなく、ただの彼女の彼氏。うん。とてもいい響きだ。鈴子の彼氏。

え〜と……まあ、それ以外には取り立てて自慢できるような特徴がないのが特徴の普通の高校生である。

「早いつて！」

「急がないと間に合わないでしょ!？」

僕が声をかけると、何故か彼女は更に速度を上げる。それを見上げた僕は慌ててしまい、階段に足を引っ掛け倒れそうになった。

「うわつとと……」

それでも、なんとか堪えて彼女の後を必死で追いかけた。

鈴子はそんな僕に気を配ることもなく階段を上っていくと、階段

を上りきるその手前の踊り場で足を止めた。そこから遅れる事、三秒弱。彼女に追い付くと、荒くなった呼吸を整えてから、階段の途中で立ち止まった意味も知らずに、

「それで、どうするつもりなのさ？」

と言いながら、顔を上げる。そして、目の前の物体に驚愕した。

そこには壊れた机とか体育祭・学園祭の小物などが山積みになされていた。無理やりに積み上げたであろう部分もあり、ちよつと下手をしたら崩れてしまうのではないかと思うほどの不安定さ。それは僕達の侵入を拒んでいるようにすら見えるぐらいだ。

「うげ。す、進めるのか？これ」

「だから、無理してこなくてもいいのに」

鈴子は僕に気を使う様子もなく、小道具に足を掛けるとそれらを思いつきり踏ん付けて進みはじめる。僕もちよつと躊躇いながら同様にして道具の山を登り越えて行った。

僕達の目的地はその先に見える侵入禁止と書かれた扉。その向こうにある屋上だ。そして何故、屋上を目指しているのかというと、そこに一人の生徒がいるからだ。

ただいるだけなら大した問題ではない。廊下・階段を走っている僕達と同レベルの罪だろう。

しかし、そんな些細な問題ではない。屋上には今にも飛び降り自殺をしようとしている生徒がいる。

これは緊急事態なのだ。だから、生徒会長である鈴子はこんなに急いでいる。何とかして、それを阻止しようと必死なんだと思う。

高校全体がざわついてきている感じはあるが、まだ甲高い悲鳴は聞こえてこない。まだこの先にいるはずだろう。

気持ちを入れ直して、大きめに歩幅をとった時だった、

ベキッ！

足元で嫌な音がする。次に起こるであろう事態の予測は付くが、対応は出来ない。出来た事といえば、咄嗟に目を瞑る事ぐらいだ。

足が沈む。だが、僕がそれ以上落ちて行く事はなかった。不思議に思い眼を開けると、鈴子とその腕を掴んで支えているのが見えた。

「あ、ありがとう」

引つ張り上げてもらった僕は、視線を逸らしながらお礼を言う。逆の立場なら格好は付くのだろうが、これじゃあ見つとも無いだけだ。

「だから無理しなくてもいいって」

「ほら、だって俺、男だし？」

「理由になってない」

些細な強がりをして見せるが、鈴子は呆れた様子で冷たく言い放つ。

「えーと、だな。大体、どうやって止めるのか考えているのか？」

「知らないわよ。でも、生徒会長として何もしない訳にもいかないでしょ!？」

扉の前まで辿り着いた鈴子は、二の腕に巻き付けられた腕章に手を添える。

「まずは対策を考えよう。可部井さんを刺激しないようにだな……」

「それじゃあ、行くわよ!」

「優しく声を掛けつつ、援軍を待とう……って、おい!」

そんな僕の話などはまるで聞かずに鈴子は勢いよく扉を開ける。夕焼けの射光が眩しくて、僕は思わず顔を逸らした。

「自殺なんてやめてこっちに来なさい!」

威勢のいい第一声を放つ。鈴子の癖なのだろうが、やや威圧的過ぎると思う。

扉の向こう、屋上のフェンスを越えた先。少しの足場とも呼ばないぐら^{かべいちより}いのスペースに茶髪の女子生徒が見えた。情報通り。名前は可部井千代里。三年生。一年からずっと同じクラスで多少は話した事もあるが、目立たない地味な子だ。

可部井さんは一度鈴子のほうを向いてから、何も言わずに視線を前方に戻す。僕は扉の影に隠れていたが、僕の姿も見えたのだろうか？

「今そっちに行くから!動かないでよね!」

問答無用で駆け出す鈴子。こういう時って、ゆっくりと近付くの

が正解じゃなかったっけ？

一気に距離を詰めると、フェンスをよじ登り可部井さんの隣まで行こうとする。可部井さんの注意もそちらに向けられており、鈴子から離れるように後退る。

今のうちに気付かれないように背後に回り込もう。僕も屋上へと静かに足を向けた。きっと何か出来る事があるはず。何かの役に立つはず。やればできるはずだ！

(2)

校舎の屋上、そのフェンスを越えた場所。一寸先は奈落の底。そんな場所に立っているのは、二人の少女。鈴子と可部井さんだ。

「ほら、危ないから。戻りましょ」

鈴子が柔らかく声をかけながら手を差し伸べて、一歩だけ歩み寄る。それに触れないように、可部井さんは無言のまま一歩下がる。

そんなやり取りが繰り返されて数分が過ぎていた。

同じく、屋上のフェンスの外側。丁度その角になっている部分で、僕は身を屈めて様子を窺っていた。

僕の眼下。校舎の下やその向こうのグラウンドでは、生徒や先生達が事の成り行きを見守っている。些細な動きがある毎に大きなどよめきの声を上げていた。

正直言ってかなりヤバい。何がヤバいのかって？下を見ると、足が竦んで動けなくなってしまうような事だ。

今すぐにも戻りたい。

それでも、僕はそんな気持ちを抑えてここで待ち続ける事を選択した。鈴子に少しぐらいはいいところを見せたいから。そんな下心めいた気持だけが僕を踏み止まらせていた。

どよめき声。また一歩だけ彼女達が動く。

鈴子が可部井さんを一歩ずつこちらに追い込んでいる。後十歩も下がってきたら、後ろから飛びかかる手もあるだろう。ちよつと強引かもしれないが、鈴子に他の手があるとも思えない。力負けすることはないだろう。イけるはずだ。

しかし、思い描いたようには進まない。

「可部井さん、もう一度よく考えてみて！」

「そんな事して誰が喜ぶんだ！」

ようやく屋上に到着した数人の教師。それが、各々声を掛けはじめたのだ。これで、僕達はお役御免かと一瞬思ったが実際は違った。

教師達を見た可部井さんの表情が引き攣り、次の瞬間、飛び出そうとしていたのだ。

そう言えば、あまり大勢で押し掛けるのも重圧を感じて良くないと聞いた事がある。これじゃあ、逆効果になるのだろう。

などという思考をしている間にも、可部井さんはそこから飛び降りようとしていた。

——しまった！考えるより先に動くべきだった！

僕は後悔すると同時に案がえる事を止めて、飛び出していく。

「そっちはダメッ！」

僕が手を伸ばすよりも早く、鈴子が可部井さんの身体を捕まえて引き寄せようとする。

だが、可部井さんも抵抗をみせた。

「いやっ！近寄らないでッ！！」

鈴子に体当たりをかましてフェンスに叩きつけると、その反動でふら付きながら後ろに下がる。そして、足を踏み外し、その身体がゆっくりと空に吸い込まれてゆく。

「危ないッ！」

今度は僕が片手で可部井さんの腕を捕まえ、引っ張り戻す。そのままの勢いでフェンスに激突した。

「っう！！」

でも、大丈夫。その手は離さずにしっかり握られている。きっと、可部井さんは無事だろう。

「大丈夫？」

それでも、とりあえずは確認しておく。

「ん？」

よく見ると僕は胸元に可部井さんを抱き入れていた。左手で可部井さんの右手を握り、左手は何故か可部井さんの腰の辺りに廻され

ている。慌てて離れようとするが身体が思ったように動かない。思考回路もショート気味。如何したらいいのかわからなくなっていた。超至近距離。鈴子もこんな風に抱きしめた事はないであろう。

僕の眼下には可部井さんのボブヘア。それは、普段とは違う感じの髪型だった。マッシュルームレイヤーよりも全体的に丸みのありはねっ毛の多い髪型。こうしているだけほのかなシャンプーの香りが鼻腔をくすぐる。

いつもはもつと飾り気のないショートボブなのに、如何して今日だけこんな事をしてるのだろうか？

「う、うん……」

鈴子の時とは打って変って、僕の腕の中にいる可部井さんは意外にも大人しかった。そして耳まで真っ赤にしながら、僕の胸ぐらに顔を埋めている。

こういうの、何て言うんだろうな？良くわからないけど、なんだかすごくいい感じなものだと思う。

だがそんな空気に浸る事もなく、鈴子の驚いたような表情を見て僕は一瞬で我に帰った。

「役に立つただろ？」

「そう……だね」

笑顔を作りながら声を掛けると、鈴子は何故か避けるように視線を外してしまうのだった。

それでもまだ暫く、僕達は抱き合ったまま動けないでいた。

*

その後、可部井さんは教師達にセクハラかと思うぐらいにガツチリと身体を支えられながらフェンスの内側へも連れ戻される。

可部井さんは俯いたままでその足取りは重い。背中を押して貰っても、屋上から出て行こうとはしなかった。

「大丈夫か？」

などと教師が呼び掛けても可部井さんは黙ったままで、何を考えているのかは分からない。だが、これでひとまずの危険は去ったと思っただろう。

まだフェンスの向こうにいた僕は、ようやく肩の力を抜いて安堵の溜め息を付く。

「ありがとう」

鈴子が僕の肩にポンツと手を置いた。

「いや、それほどでも」

「それにしても、長い事抱き合ってたけど？」

声の調子は変わらないが、引き攣り気味な表情から不満がある事

を伝わって来る。可部井さんと抱き合ったままだった事が気に入らないのだろう。

「い、いや……だって、離れたら不味いだろ？」

「ふーん？」

「だから、可部井さんが離してくれなかったただけだって……うわっ！？」

不意の突風。それが彼女のスカートを全身全霊込めて捲り上げた。

「きゃ！」

彼女はそれを押さえようとせず、突風に負けないようにフェンスにしがみつく。見えた物は、飾り気のない白のパンティ。普通に味気ない感じだが、そこが彼女らしいと思う。

いやいや、じっくり見てる場合じゃないから！

咄嗟に彼女とは逆の方向に顔をそむけて、俺と鈴子の間を両手で隠した。僕は何も見てないぞ。うん。見てない。

しかし、それが失敗だった。その風が去ったと思った次の瞬間。再度、突風が僕達を襲った。しかも、前よりも強力な風。

背中から風に煽られると、僕の視界が激しく揺れる。

「うわわっ！！」

そのままバランス感覚を失った。その時になって、自分の愚かさに気付いたがもう遅い。

——落ちるッ

それは確信だった。これはもう、自力ではどうしようのない事態。

鈴子を目が合う。助けを求めるようにバランスを取るのに必死になっっている腕を伸ばそうとする。しかし、鈴子はフェンスにしがみ付いたまま動けないでいた。

鈴子に助けを求めるのは早々に諦めて、視線を泳がした。しかし、他に助けってくれそうな人は見当たらない。

もう駄目だ——

やがて、堪え切れなくなった足が離れる。浮遊感。直後に待つているのは自由落下。

ここで僕の記憶は途切れている。これが最後の記憶だった。

最後の瞬間、僕は何を見ていたのだろうか？

僕が土に還るまで（１）

運命とは占いよりも曖昧で、人の心よりも誰かの影響を受けやすい純粋なものだったのかもしれない――

「こんにちは、可部井千代里さん。あなたの魂、引き取りに来ました」

その声で僕の意識は覚醒する。目を開けて、ゆっくりと顔を上げた。

真っ先に視界に映ったのは一人の少女。

年齢は十歳前後。身長は僕の腰の辺りよりちょっと上と言ったところ。黒髪の前髪パツツンで後ろは三つ編み。最近は見えない昭和スタイルな髪型だ。しかし、着ている物は、白いフリル付きの真っ黒なワンピースで、ゴスロリな感じで、今風……なのだろうか？女性のファッション何てサッパリ分からないし、こんな子どものファッションなんて未知の領域だ。

二、三度瞬きをして目を凝らす。少女の向こうに見えるのはいつもと変わらない学校の校舎。でも、いつの間にか夜になっている。職員室の明かりがなければ、真っ暗で何も見えないだろう。

最後に自分を見る。手もあるし、足もある。感覚もあるし、思っ

た通りに動かす事も出来る。頭もついてる。怪我ひとつない健康な身体だ。

「……こんちわ」

とりあえず、立ち上がると挨拶を返す。

が、今はそんなことより、気になる事が沢山がある。

僕は、死んだんじゃないかったのか？

僕は、落ちてから今まで何をしていたのだろうか？

何で、こんなところに寝かされていたのか？

「なあ……」

「あれ？男？貴方は男だね？」

僕が疑問を投げかける前に、少女が先に問いかけて来たのでそれに応える。

「男だけど」

「えーっ……嘘！今日はちゃんと確認したはずなのに！」

少女は大げさに頭を抱えた後、ワンピースのポケットから一枚の紙を取り出すと、

「可部井千代里。一七歳。女性。死因は学校の校舎から飛び降り自殺……」

暗い中で、目を細めてそこに書かれていると思われる文字を読み上げていく。

可部井千代里。さつき飛び降り自殺をしようとしていたボブヘアの同級生。

「その子なら、俺が助けたけど」

「そうなの？ならいいわ」

さつきみたいに驚いて「えーっ！！」とか言ったりするのかわかっただけど、今度はあっさりした反応で流された。

「なあ……」

「ところで貴方は誰？」

また遮られる。

「芦馬圭太。彼女を助けた代わりに落っこちた人……かな？」

「ドジ踏んで、お亡くなりになった訳ね」

少女は小馬鹿にするようにくすりと笑う。それよりも、『お亡くなりになった』か。

「う。それよりも、やっぱり僕は死んだのか？」

「うん。そうね。で、何で死んだの？」

やっぱり、そうなのか。今のこの状態がお化けとか幽霊って奴になるのだろうか？

「学校の校舎から落ちて……かな？」

こちらから聞きたい事は無尽蔵に溢れてくるが、まず先に少女の

質問に答えて行く事にする。

「それはもう聞いた。何で落ちたの？」

「え？え」と……」

スカートの中を見ないように必死で顔を背けていたら、足元が疎かになった？

スカートが捲れて、その中を見たら慌ててしまった？

パンツが白かったから？

素直に風に飛ばされたとも言えば良かったのだろうが、何故か僕の頭の中はスカートの中身に支配されてしまっていた。考えれば考えるほど、頭が真っ白になっていく。

「何でそんな難しい顔してるのよ……？まあ、いいわ。情報を集め直すからちよつと待てって」

僕が答えられないでいると、少女は片手を前に出して僕の思考を遮った。

彼女の持っていた紙が、微かに白く光ってスウツと消える。その後、ポケットの中から、もう一枚紙を取り出した

「よしつと。芦馬圭太。一七歳。男性。死因は強風でスカートが捲れたから……こんなもんか」

「ちよつと待てえ！」

死因を聞いた途端に、思わず声を荒げて突っ込みを入れずにはいられなくなった。

「何よ？」

「聞きたいのはこっちだよ！なんだその死因は！」

「私が分析した正確な死因よ」

「何処が正確だ！何でそんな自信持つて言っただよ！」

「私が死神だから」

「はい？」

あっけらかんと言つてのける少女に、思わず変な声が出てしまう。

「私は死神で、貴方は死者。私はそれをあの世に運ぶ仕事をしているの。理解できた？」

よくよく考えれば、僕は死んでいる訳か。死後の事なんて誰も知らない訳だし、現実では通用しないような超常現象でも超展開でも何でもありなんだろう。多分。

今はこれで納得しておくのが一番なのかもしれない。

「できたよ。できた。でもな、そうじゃなくて、その死因を何とかしろって言いたいんだよ」

「何処がおかしかった？」

少女は理解できないといった様子で首を傾げてみせる。

「おかしいだろ！すごくおかしい！スカートが捲ただけで死ぬ人間がいるのかよ！拳銃も毒ガスも真っ青だわ！」

「それで校舎から落ちたんでしょ？さっき自分で言つてたから省略しただけよ」

少女は付き合つてられないといった様子で手に持っていた紙切れを見せ付ける。そこに書かれていたのは、

『強風でスカートが捲れた時に精神が乱れ、バランスを崩して校舎から転落』

うん、間違いない。それは間違いないのだが、もっと違う書き方は出来ないものだろうか？僕にだってプライドぐらいある。死因を聞かれてもこれを読み上げる事は絶対にしないと思うぞ。

「これじゃあ、女性の下着すら見た事ないドーターみたいじゃないか……？」

「実際ないでしょ？」

「それぐらいあるわ！さっき階段を上っている時にハッキリと見えていたし！」

「ほうほう、じっくり観察しすぎて足が纏れたと？」

「う」

言われてみれば、そんな事もあった。階段を上っている時の些細な出来事まで把握しているなんて思ってもみなかった。

この分では、これ以上食い下がっても更に墓穴を掘るだけのよう
な気がしてくる。

仕方ないので、自分の死因については一先ず諦める事にした。

「そう言えば、お前の名前は何て言うんだ？」

「名前？」

そうだよ。名前だ。これが人に尋ねる時の正しい順序だろう。

「呼び方が分からないと不便だろ？」

「まあ、名前なんてどうでもいいけど。西城義美。さいじょうよしみよみって呼びな

「さい」

「ふーん。義美か……」

「あん？」

少女の声のトーンが一気に下がった。しかし、身体も小さく、それほど迫力があるというよりも年相応の可愛らしい感じである。

「よみか。いい名前だな」

それでも、今はあまり逆らわない方がいいと考えてすぐさま訂正しておいた。

「ふん。まあ、いいわ。ところで、貴方が最後に見たいものは何？」

少女は一度小さく咳払いをしてから、真面目な顔をして僕にそう尋ねたのだった。

やれやれ、この分だと僕のターンはまだ遠そうだ。

(2)

「これから、今の貴方に出来る事を簡単に説明するわ」

そう言って連れて行かれた場所は、高校の正門を出てすぐ目の前にあるコンビニだった。

「基本的には、貴方達の想像してる幽霊と大差はないと思うけど。口で説明するのは面倒だから、見ててね」

よみはコンビニの入口である自動ドアの前に立つ。しかし、自動ドアは全く反応しなかった。中の電気は付いているし、店員の姿も見える。それでも、自動ドアは開かない。

そんな事は気にせずに、よみは更に足を踏み出していく。

「おい！ぶつかるぞ！」

と、僕が叫んだのも束の間。よみの身体は自動ドアをすり抜けて店中に入っていた。

「えーと、あれ……？」

「幽霊だから。貴方にもできるわよ。さあ、こっちに来て」

よみに手招きをされて、自動ドアの前に立つ。やっぱりというか、なんというか、その扉は開いてはくれない。

「出来るって言われてもなあ？」

恐る恐る手を伸ばす。自動ドアに触れ、その透明なガラスに手がめり込んでいく。確かに、通り抜けられそうだ。

だがしかし、特に何も感じない事への違和感や気持ち悪さもある。

うーん。考えていてもはじまらないか。

その手を引き抜くと数歩下がり一度気合を入れ直してから、

「ええい！」

勢いを付け、両手でガードしながら自動ドアに頭からダイブする。

すかつという効果音はこういうときに使うのだろうか？何事もなく自動ドアを通り抜けた僕は店内に着地した。どうやら無事に抜けられたようである。

「ふう……」

「斬新なやり方ね。まるで、窓ガラスを割って出てくるアクションスターみたい」

「そ、そんなに格好良かったか？」

「こんな事にここまで気合入れる人を見た事ないから、呆れてるの」

よみは視線を外して、大袈裟に溜め息をついてみせた。それから、静かな店内を見渡す。

僕も釣られて、店内を見渡した。

そこに客の姿は見当たらない。雑誌のコーナーに一人ぐらいはい

てもいいと思うが、高校生の客が多いからか、この店で雑誌の立ち読みをしている大人は滅多にいなかった。

「次は、この人を本気で驚かせてみて」

「驚かせるって……」

よみはレジの辺りで暇そうにしている店員の隣に立つと店員を指さす。

「大丈夫よ。幽霊なんだから」

「うーん……」

所謂、心霊現象みたいな事でも起こるのだろうか？

何が起こるのか興味もあったので、促されるまま店員の前に立つと、大きく息を吸い込んで、

「わっ！！」

両手を上げながら大声を上げると、暇そうな店員は、欠伸をしながら、店の奥へと消えて行った。こちらに気付く気配は全くなし。

幽霊らしく両手をあげたままの体勢で固まったまま、「何故、こんな子どもだましをしてしまったのだろうか？」と激しく後悔する。

それを見ていたよみも、隣でクスクスと笑っているし。

「如何？わかった？」

「何がだよ？何も起こらないじゃないか」

「何も起きなくていいのよ。貴方はこの世界に干渉出来し、世界が

らも干渉されないの。だから、自動ドアにも邪魔されないし、仕事の邪魔も出来ないの」

「ふーん」

「わかった？」

「わかった。でもさ、僕は地面を蹴って歩いてるよな？」

靴のつま先で地面を軽く叩いてみせる。

「魂に形はないわ。全部、貴方のイメージよ。その姿も形もただのイメージでしかないの」

「イメージねえ……」

「実際の貴方は空気そのものよ」

改めて自分の手足を見てみるが、それを実感する事は出来なかった。

「それじゃ、次の説明に行くわよ」

(3)

僕達は夜道を歩いていた。

よみが先を歩き、僕がその後を付いて歩く。視界に入らないような小さな子どもたちの後ろを歩くのは存外に難しい。横に並んだ方がいいのかのしれないな。

「そうそう。貴方は幽霊になってあの世に送られる訳だけど、すぐにあの世に送り飛ばす訳じゃないわ」

そんな事を考えていると、不意によみがこちらを振り返る。目的地に着いたのかと思い僕は足を止めたが、よみは後ろ向きのまま話し、歩き続けていた。

「僕に何かをやれって事か？」

「馬鹿ね。何も出来ない魂で何をする気なのよ？」

「う。そうだけども。まだ隠された力があるとか……」

「隠された力って何よ？」

「誰かの守護霊になれとか……」

「はぁ……」

僕が一言はなつ度に、よみの呆れ顔が露骨になっていく。そんなにおかしなことを言っているつもりはないんだけど。

「じゃあ、何をすればいいんだよ？」

「基本的に自由にすればいいわ。行きたいところに行って、見たい世界を見てくればいいわ」

「それだけ？」

「うん。それだけ」

拍子抜けである。折角、幽霊になったのだから、もっと特別な事をしてみたいものだが。

「でも、それ以上の事は出来ないわ。それでも、人間らしくいられる最後の時間よ。まあ、未練がないなら別にどうでもいい時間かもしれないけどね」

幽霊になったからではなくて、まだ人間らしくか。考え方が違ったらしい。

「折角だし、世界一周旅行でもしてみようかな？」

「別にいいけど。期限はしっかり守って貰うわよ。今日から一ヶ月間」

指を一本立てて、僕の顔面に押しつける。

「これまた、唐突だな。気の済むまででいいじゃないか」

「そうはいかないわ」

「何故？」

「だって、魂は腐るもの」

「腐るとは思えないけど」

「肉体を失った貴方はやがて腐るのよ。流れを失った水が腐るようにね」

納得できるような、出来ないような。それでも、僕はよみの話に相槌をいれていた。

「それで、本当に世界一周なんてするの？他にもっと気になる事があるんじゃない？」

「うーん、気になる事かぁ……」

真っ先に浮かぶのは彼女の顔。いや、彼女達と言った方がいいかもしれない。

「例えばでいいからさ。他の人は何を見てから、あの世に行くんだ？」

「自分の葬式だけ見たら、さっさと送ってくれて人が一番多いわね。後は、時間ギリギリまで恋人や家族の傍にいたりとか？」

「ふん。もう少し考えてみる……」

僕が考えていた事もそんなところだろう。

「それと、世界一周した人は私の知る限りではないわね」

「それはどうでもいい」

「あっそう」

僕は歩きながら、腕を組んで思案する。

とはいえ、僕が気になるものなんて極僅かだし、誰かの傍にいるのならその相手も決まっていると思う。それなら、考えなくてもいいなんて言われるかもしれない。だが、見て後悔するのなら見たくないし、何も出来ないなら見ない方が楽な気もする。元々、大した関係でもなれば、昨日今日の関係だ。

「着いたわよ」

「え？」

よみの歩みが止まる。考え事をしていた僕はそれを見ていなかった。

「うわっ！！」

気付いた時には、よみに蹴っ躓いていた。それから、一回り小さいよみと纏れるようにアスファルトに倒れ込む。

「いつつ……」

「何でぶつかって来るのよ……？」

「そんな事急に言われても無理だろ……」

「さっきは止まったじゃない！」

幽霊とか肉体がないとかあまり実感がわかないけど、擦り？いたであろう傷はいつものように痛かった。

「……ごめん」

僕は立ち上がると読みに差を差し伸べるが、よみはその手を払いのけて一人で立ち上がった。

「この中に入るわよ」

そして、よみが指差したのは、よく見慣れた白くて大きな建物。

「病院？」

そう。そこは市内で一番大きな病院。市民病院だった。

「何があるんだ？僕の死体でもあるのか？」

「さあ？それは知らないわ」

「じゃあ、何……」

「それじゃあ、行くわよ」

結局、よみは僕のまた質問には答えないまま、さっさと歩いて行ってしまうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2032ba/>

僕が落ちて消えるまで

2012年1月10日05時46分発行